

【問題1】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

映画史に金字塔のように輝く一作、スタンリー・キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」は、「光あれ」で始まる。長い暗転が続き、観客を不安にさせたところで一条の光を差し込まれるという仕掛けは、「創世記」の冒頭の一節を想起させずにはおかない。

というわけで、この作品はきわめて宗教的であることを隠そうとはしていない。時空を超えた創造主的存在を大前提としているという意味でも。ただし、主題曲に、「神は死んだ」と宣言したニーチェに触発されてリヒャルト・シュトラウスが作曲した「ツァラトゥストラはかく語りき」を使用しているという皮肉は別にして。

もっとも、この映画については何を語っても今更の感はぬぐえない。なので、あくまでも a 中の素材が適用できる範囲でのコメントに絞りたい。それもとどろあえず二点に絞って。

まず突っ込みたいのは、冒頭のモノリスと猿人のシーン。謎の漆黒の物体モノリスに触れた猿人は、まるで知恵の実をかじったイブのように墮落し、道具の使用と肉食の味を覚え、一気に凶暴化する。

じつはこれ、南アフリカで猿人アウストラロピテクスを発掘した人類学者レイモンド・ダートの説にイ拠している。ダートは、猿人化石といっしょに石器が多数見つかったことから、無力な猿人が石器という武器を手にしたことで人類進化が加速されたという仮説を唱えたのだ。

この映画は、作家アーサー・C・クラークと映画監督スタンリー・キューブリックという二人の異才がタッグを組んだ作品である。人類と文明の行く末を危惧した二人は、武器の使用が人類の起源に結びついたという仮説に飛びついたのだろう。

ほかがこだわりたいもう一点は最後、精子の形状に似た宇宙船の飛行士が胎児となってブラックホールのような場所に吸い込まれていくシーン。

これは、人類を造り損ねた宇宙の創造主がリセットを図ったということととれる。

しかし瀬名秀明さんによれば、クラークは楽観的な懐疑主義者であり、宗教的な人間ではないという。したがってそこに宗教的な意味をとるべきではないだろう。キューブリックにしても、宗教的な人間とは思えない。

映画館で初めてこのシーンを観たときの感想は、「個体発生は系統発生を繰り返す」、すなわち生物進化の道筋はその生物個体の発生過程に再現されているという b の激しいテーゼ、生物発生原則の裏返しだなというものだった。

このテーゼは否定されて久しいのだが、いまだにけっこう人気がある。ヒトの胎児の発生は、魚、爬虫類、他の哺乳類の各段階を繰り返しているように見えるからだ。

しかし、そのすべてを繰り返すとしたら、とても十月十日（正確には九カ月）という妊娠期間では足りるはずもない。

いや、科学的に不正確だからこの映画はダメだと言いたいわけではない。むしろ、科学を果敢にアートの取り込み、両者の間合いを埋めたという点で、ほかが目指す一つの理想である。

科学はアーティストの創造力を刺激してやまないネタにあふれている。

ひところ、出版界はちよつとした歴史ブームだった。世界史をさまざまに読み解く解説本の新刊が目についた。学校教育における歴史教育への政治的介入も世を賑わせた。

ちなみに、歴史を日本史と世界史というように国内外二つに分けて教えるのはグローバルな基準ではないという。たとえばヨーロッパで、フランス史、ドイツ史という区分けにいかなる根拠があるかを考えてみればいい。最小の区分けはヨーロッパ史であるべきであり、人為的な国境による区分けに意味はないのだ。

その伝でいけば、世界史という区分も妙な響きを帯びる。現生人類の歴史はたかだか二〇万年。そのうち文字史料で語れる「歴史」はたかだか七万年にすぎない。人類を生み出した生命の歴史は三八億年。その生命のゆりかごたる地球の歴史は四六億年もある。宇宙の歴史に至っては一三八億年だ。

そんなスケールに立った視点から歴史を語ろうとする試みがビッグヒストリーである。歴史学者アヴィッド・クリスチャンがオーストラリアのマッコーリー大学で一九八九年から開始した講義がその起点だった。

宇宙開闢のビッグバンから説き起こし、人類の歴史は狩猟採集時代、農耕時代、近代という大きくくりで概観する。ローマ帝国や、宗教戦争、世界大戦などを軸に語ることはしない。この講義のDVDを二〇〇八年に観たビル・ゲイツはいたく感動し、一〇〇〇万ドルを寄付して世界配信のプロジェクトを支援している。この壮大な歴史語りのエッセンスをギョギョッと圧縮したのが『ビッグヒストリー入門』である。

人類の歴史を上記の三つの時代に分けると、いささか居心地の悪い事実を突きつけられる。狩猟採集時代が全体の九五パーセント以上を占め、農耕時代は一万年ほど、近代に至ってはわずか二五〇年にすぎないのだ。

ルース・ドフリースの『食糧と人類』では、食糧増産のために人類が重ねてきた c の歴史が語られている。しかし農業生産も工業生産も、それを支える基盤的資源は太陽であり、地中の鉱物資源である。いずれも有限だ。いずれは避けたい資源の枯渇を見据えつつ、実現可能な打開策は未だに見出せていない。右肩上がり近代が、むしろ残された時間を縮めているのではないのか。

では、農耕の発明（農業革命）に先立つ一九万数千年の狩猟採集時代は何だったのだろうか。長い助走期間にすぎなかったのだろうか。その間に人類は、徐々に知能を発達させたのだろうか。いやそんなことはなかったと、ユヴァル・ノア・ハラリの『サビエンス全史』は断言する。その間、人類の脳に大きな変化はなかったし、農耕時代の平均的な農耕民は、平均的な狩猟採集民よりもあくせく働かされ、食べ物も劣っていたという。

ハラリは、ジャレド・ダイアモンドの名著『銃・病原菌・鉄』を参照しつつ、「農業革命は、史上最大の詐欺だったのだ」とまで言い放つ。

ハラリはここで視点の逆転を提案する。農業革命を推進したのは栽培化された作物であり、人類はむしろ家畜化されたのだと。その証拠に、小麦や米、トウモロコシは世界中で栽培され、種族として大繁栄しているではないか。われわれのほうが家畜化されたのだ。それでも農耕により、単位面積当たりの生産量が増加し、人口は急増した。人類は、個人としてではなく、種としてその恩恵に浴した。その恩恵を維持すべく、人類は宗教や哲学、科学を考案してきた。ハラリの書は、「全史」というよりはむしろ「サビエンスの正体」ともいえるべき内容となっている。

かくして人類は、人口増加を支えるために地球環境を改造してきた。ここに来て、過去二〇〇〇年は、新しい地質年代「人新世（アントロポシオン）」として区分すべきだという提案までなされている。この視点から、歴史を見直すときがきているようだ。

ハラリが目置くジャレド・ダイアモンドは、一九七〇年代にニューギニアの鳥類群集に関する論文を立て続けに発表し、多彩な才人として、そのころすでに伝説的な色彩を帯びていた。

彼の本職はあくまでも生理学（当時はカリフォルニア大学医学部教授）であり、生態学は余暇の片手間仕事。ビアノはクロロ人はだし、密林で姿の見えない鳥の種類は絶対音感で鳴き声を聞き分けて識別。何カ国語にも通じている、などといったうわさが漏れ伝わっていたのだ。

そんなわけで、一九九八年一〇月、コスモス国際賞を受賞するために来日した際には、さっそく本人に事の真偽を確認しないわけにはいかなかった。

彼のバードウォッチング歴は七歳に始まる。生理学で博士号を取得した後も鳥にかける情熱絶ちがたく、一九六三年にはアマゾン、一九六四年からは三年続けてニューギニアへの冒険探鳥旅行をカン行した。そして一九六六年、群集生態学の革命児、故R・マッカーサーとの運命的な出会いをし、研究の方向が定まったという。それ以来彼は、生理学者と生態学者という二つの顔を使い分け、一九八〇年代に入ってから、比較生理学的な研究を進化生理学と命名し、進化化学を軸に両者の統一を図ってきた。

子ども時代から文学や語学など幅広い興味を抱えてきたダイアモンドは、折に触れて科学エッセイを発表し、それらから発展させた『人間はどこまでチンパンジーか?』（原題は『第3のチンパンジー』）を一九九一年に世に問うた。これは人類進化の歴史を進化生物学、分子生物学、人類学、地理学、民俗学、言語学等々、幅広い知識を援用して概観した意欲作で、英米の出版賞に輝いた。その六年後、人類の旧石器時代（二万三〇〇〇年前）以後の歴史を、同じような観点からさらに壮大なスケールで描いた『銃・病原菌・鉄』が、一九九八年度のピューリッツァー賞と一九九八年度のコスモス国際賞に輝いた。

この本の内容を一言で要約すれば、文明の発達度に見られる人種・民族間差は、一般に誤解されているような遺伝的能力の差ではなく、居住環境の差異だったというものである。氷河期が終わり、世界各地に分散して狩猟採集生活を営んでいた人類は、高い適応能力をフルに発揮し、それぞれの環境に適した生活を発展させていった。ところが皮肉なことに、そのことが逆に、文明発展の地域間格差をもたらしてしまったというのだ。

なぜならば、創意発明の才は全人類に共通ではあったが、作物化あるいは家畜化できる野生動物植物が息息していない場所では、農耕を基盤とした定住生活に入ることも望むべくもなかったからである。

また、他の地域で開発された作物、家畜文化などの伝パンも、地理的、環境的条件によって翻ロウされた。かくして、病原菌耐性、文字、鉄器などを欠いていたアメリカ大陸はヨーロッパ人にたやすく踏みじられ、ニューギニアやアマゾンなどでは、狩猟採集生活をする「裸族」が最後まで残った。要約すると単純にして明白に聞こえるが、これを博引旁証し、説得力豊かに論じるダイアモンドの才知や筆力には恐れ入るしかない。ライバルがいるとしたら、一九九七年度コスモス国際賞の受賞者ドーキンスだろうか。しかしおもしろいことに、ダイアモンドはドーキンスの著作は一冊も読んだことがないと、多くの問いに答えた。

唯一残念な点があるとしたら、著者のオリジナリティが一部判然としない点だろう。しかし、知的好奇心を満たしてくれる必読の書であることはまちがいない。

（渡辺政隆『科学で大切なことは本と映画で学んだ』より）

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- (1) イ掬 ① 位置 ② 以外 ③ 衣裳 ④ 帰依  
 (2) クロ人 ① 素材 ② 黒点 ③ 幽玄 ④ 苦勞  
 (3) カン行 ① 観点 ② 発刊 ③ 貫徹 ④ 勇敢  
 (4) 伝パン ① 一般 ② 搬送 ③ 頒布 ④ 販売  
 (5) 翻ロウ ① 愚弄 ② 明朗 ③ 労働 ④ 敬老

問二 空欄 a・b・c に当てはまる最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- |      |        |        |        |        |
|------|--------|--------|--------|--------|
| 空欄 a | ① 自己満足 | ② 自家薬籠 | ③ 孤立無援 | ④ 自由闊達 |
| 空欄 b | ① 毀誉褒貶 | ② 異口同音 | ③ 不惜身命 | ④ 縦横無尽 |
| 空欄 c | ① 自縄自縛 | ② 頑迷固陋 | ③ 順風満帆 | ④ 創意工夫 |

問三 傍線部A「この作品はきわめて宗教的であることを隠そうとはしていない」の内容を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 常識を破るほどの長い暗転を続かせるという仕掛けを行い、観客を不安にさせた、ということ。
- ② 旧約聖書の冒頭である「創世記」の一節を忠実に表現した内容を映像化した、ということ。
- ③ 観客に対して創造的存在を意識させるような仕掛けを冒頭で行っている、ということ。
- ④ 「神は死んだ」と宣言したニーチェに触発された曲を主題歌として使用している、ということ。

問四 傍線部B「世界史という区分も妙な響きを帯びる」の理由を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① グローバルな基準にしたがえば、国内外の歴史を二つに分けて教えるのは不自然な感じがするから。
- ② 宇宙や地球の長大な歴史からすると、人類を中心とした歴史区分は適切でないように思えるから。
- ③ 地域で区分するという歴史の基準から考えると、世界史という大きな区分には無理があるから。
- ④ 現生人類の歴史のなかで、文字史料で語れる「世界史」の時代は三分の一程度に過ぎないから。

問五 傍線部C「いささか居心地の悪い」の理由を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 我々の生きている近代という時代は、狩猟採集時代や農耕時代と比較すると、ほんのわずかな年数に過ぎないから。
- ② 狩猟採集時代、農耕時代、近代という時代区分は、それぞれ年数が大幅に異なり、アンバランスであるから。
- ③ 人類の歴史のうちで九五パーセント以上を占めるのが移住を必要とした狩猟採集時代であったから。
- ④ 宇宙開闢のビックバンから説き起こすと、人類の歴史は三分区分できるとはいえず、二〇万年にすぎないから。

問六 傍線部D「右肩上がりの近代が、むしろ残された時間を縮めている」の内容を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 歪んだ発展をもたらしてきた近代という時代が存続することで、人類が生きられる時間が狭められている、ということ。
- ② 威風を誇らし権勢を誇ってきた近代という時代が永遠に存続するわけがなく、やがてその終焉が訪れる、ということ。
- ③ 近代に入ってから人類は生産を増大させ、豊かな生活を築いてきたが、それは資源を枯渇させ、やがて人類の終焉を招く、ということ。
- ④ 近代に入ってから人類は生活の能率を著しく向上させ、多くの仕事において時間を短縮することに成功している、ということ。

問七 傍線部E「この視点」の内容を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 人類を栽培化された家畜と捉える視点、ということ。
- ② 人類を地球環境との関係で捉える視点、ということ。
- ③ 人類の進化を中心として捉える視点、ということ。
- ④ 宇宙開闢から遡って大きく捉える視点、ということ。

問八 傍線部F「ところが皮肉なことに、そのことが逆に、文明発展の地域格差をもたらしてしまった」の内容を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 人類の文化史の視点を逆転すると、農業革命を推進したのは栽培化された作物であり、人類はむしろ栽培化された作物によって家畜化されたと見ることができるよう、人類の文化発展は人類の家畜化によって地域格差がもたらされている、ということ。
- ② 人類の環境に対する適応能力は、遺伝的能力の差は存在しないと考えられてきたが、文明の発達度に見られる人種ならびに民族の間に格差は存在しており、その格差の原因についてはむしろ遺伝的な適応能力の格差と理解すべき状況にある、ということ。
- ③ 人類の環境に対する適応能力は人種や民族の間に格差はないが、世界各地に分散して狩猟採集生活を営んでいた人類が、それぞれの環境に適した生活を発展させることで文明発展の地域間格差をもたらしたのであって、この格差の原因は環境であった、ということ。
- ④ 人類の適応能力については、狩猟採集生活にいたる文明の発達度までは顕著な格差は生じないことが明らかであるが、野生動植物が生息していない地域では人類が文明を発展させることに限界があるため、農耕を基盤とした定住生活の地域になれなかった、ということ。

問九 傍線部G「おもしろい」の理由を説明したものと最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① オリジナリティというより博引旁証して説得力豊かに論じるダイヤモンドが、ドーキンスの著作を全く参考にしたことがなかったから。
- ② 驚異的な才智や筆力の点でライバルと目されているドーキンスの著作に対して、ダイヤモンドが強いライバル意識を持っているから。
- ③ ダイヤモンドが一九九七年度コスモス国際賞を受賞したドーキンスの著作を読んでいることは、彼の権威への反感を示しているから。
- ④ 世界を代表する科学エッセイストであるダイヤモンドとドーキンスの二人の間には、接点というべきものが全く存在していなかったから。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 映画「2001年宇宙の旅」の冒頭シーンは、生物進化の道筋は生物個体の発生過程に再現されるといって科学的な仮説に基づいている。
- ロ 日本では歴史を日本史と世界史というように国内外二つに分けて教えるが、こうした教え方は世界に共通のことではない。
- ハ ユヴァル・ノア・ハラリの『サビエンス全史』は、『全史』というよりはむしろ『サビエンスの正体』ともいえるべき内容の本であるが、それによると、人類は、長きにわたる狩猟採集時代を通じて、知能の上ではあまり発達しなかったという。
- ニ 『銃・病原菌・鉄』の著者であるジャレド・ダイヤモンドに関して、本職は生理学であり生態学の研究は余暇の片手間仕事であるといったうわさがあるが、著者が来日したダイヤモンドに直接確認したところ、そのうわさは全くの事実であった。

## 【問題二】

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

地震や台風などの自然災害が<sup>(1)</sup>ヒン発するにもかわらず、日本列島には古い木造建造物が多数残されている。特に法隆寺西院の金堂・五重塔・中門・回廊は世界最古の木造建造物と考えられており、その他にも奈良時代、八世紀まで遡る建造物の総数は全国で二八棟にも及んでいる。一方、木造建造物の源流となった中国大陸では、八世紀に遡る可能性があるのは南禪寺大殿のみで、朝鮮半島ではこの時期まで遡る木造建造物は確認されていない。

日本で多くの古い木造建造物が残存した背景には、異民族の侵入による大規模な戦争がなかったという側面も大きい。建造物を管理する組織が維持継承され、定期的な修理が行われたことが最大の理由であろう。

必要に応じて日常的に行われる補修、十年から数十年単位で行われる一般的な修理、百年から二百年に一度程度で行われる根本修理、この各段階を適切に実行することで、木造建造物の寿命は飛躍的に延びる。例えば、法隆寺金堂の場合、八世紀初頭に建設されてから現代に至るまで、大小合わせて約一五回の修理が行われたことが確認されていて、そのうち一六〇三年（慶長八）に行われた修理は、外観が変化するような大がかりなものだった。

このように手間暇かけて古い建造物を維持してきているので、日本では古代から一貫して建造物の古さに価値を認め、尊重してきたように思える。事実、『日本文徳天皇実録』の八五五年（斉衡二）の記事には、東大寺大仏の修理に関連して、「旧物」の修理によって得られる「功德」は「新造」よりも大きいと記されていて、古い建造物を修理することの意味を強調している。しかし、これとは全く逆の現象も指摘できるので、問題は単純ではない。

大和政権では、六九四年（持統天皇八）に藤原京を建設するまで、天皇が代替りするたびに宮殿の全面的な建て替えを行っており、七世紀以降に限ってもその回数は一五回以上に及んでいる。また、二〇年ごとに社殿を建て替える伊勢神宮のように、一定期間で新築と破却を繰り返す「式年造替」制度も、いくつかの神社で確認できる。この式年造替については、地中に埋められた柱の耐久性に由来する改築、ないしは定期的な支援を獲得するためのスキームと考えることも可能ではあるが、新築の建造物が持つ清新さに価値を見出していたことは否めない。

以上のように、古代以来の日本文化のなかには、建造物の新しさを求めつつ、古い建造物も否定しない感覚が存在していたようである。しかも、実は建造物における新しさと古さの境界は微妙で、明快に線引きできるものではない。

前述したように、長く維持されてきた木造建造物は幾度となく修理を経験している。なかでも、柱や梁などの全ての材料を取り外して、補修を行った上で再び旧材料を用いて組み直す「解体修理」は、一度更地に戻して組み上げるので、その行為自体は新築と全く変わるところはない。事実、建設事業に際して作成される「棟札」をみると、「造営」ないしは「修造」という表現が、解体修理と新築の双方で区別なく使用されており、大がかりな修理と新築との境界は曖昧であった。また、既存の建築を壊した際に生じる古材を転用して新築に用いることも一般的であったから、問題は一層複雑である。実際のところ、古代から中世に至るまでの間で、古い建造物の価値を特段に高く評価していたとは考えにくい。同時に古いから壊すということもなく、

使用に耐え、壊す必然性がなければ残すという態度が基本であった。式年造替の制度が成立する以前の伊勢神宮で、「随破修理」、すなわち破損したらその都度修理して使いつづける理念が確認できることは、こうした感覚の裏づけとなるだろう。

以上のように、日本には法隆寺に代表されるような古い建造物が他のアジア諸国よりも格段に残っているが、中世までの社会にあって、建造物の古さに特別な価値が見出されていたとはいえない。つまり「歴史的建造物」という存在は認知されていなかったのである。

建造物の古さを肯定的に捉えて、意図的にその形態を維持しようとする感覚が出現したのは、戦国期から江戸時代に向かう時期であろう。この時期には、中世まで継承された価値観や社会システムが崩壊し、新たな社会秩序に合致した建造物が爆発的な勢いで建設されている。まさしく、破壊を経た後の大建設時代にあつて、反作用のように古い建造物への評価が出現しているのである。

建造物の古さを肯定する感覚の萌芽はさまざまな事例で確認できるが、まず、古い建造物を意図的に維持していくことが制度として確実に行われていた「城郭」からみていこう。

近世城郭は、戦国大名の居住および防衛の拠点として構想されたもので、戦国期が終焉を迎える一六世紀末期には、高層の天守が聳える広大なものとなった。また、近世城郭の周辺は、武家地・町人地や社境内が計画的に配置された城下となり、そこから常に望見できる天守や大手門等は、大名家と藩、そして城下全体のシンボルとなった。

近世城郭の建設は、一六世紀末期から一七世紀初頭に急ピッチで行われたが、一六一五年（慶長二〇）元和元<sup>(2)</sup>に突如として終わりを告げている。豊臣氏が大阪夏の陣で滅亡した直後の六月、新たな覇者となった徳川氏が諸大名に向けて城郭の破却を命じたからである。このときの毛利氏宛の書状には「貴殿御分国中、居城をば残し置かれ、その外の城は悉く破却これあるべきの旨」(毛利氏四代実録考証)<sup>(2)</sup>とあり、一つの居城を除いて他を全て破却することを強制した内容が確認できる。

この「一国一城令」は、諸大名の防衛力削減を意図したものであるが、続く一六一五年七月の「武家諸法度」第六条には、

- 一 諸国の居城、修補を為す<sup>(3)</sup>雖も、必ず言上すべし、況んや新儀の構営、堅く停止せしむる事、
- とあって、居城一つへの制限に加えて、居城の「修補」の届け出を義務づけ、新規建設の停止を徹底している。これによって全国で約三千存在した城郭は十分の一近くまで減少したと推定されている。さらに、二年後の一六一七年（元和三）六月に改訂された「武家諸法度」には、
- 一 新儀の城郭の構営は堅くこれを禁止す、居城の隄壘石壁以下、敗壞の時<sup>(4)</sup>は、奉行所に達し、その旨を受くべきなり、櫓扉門等の分は、先規の如く修補すべき事、

と記されて内容が詳細になり、城郭の新規建設禁止を徹底すると同時に、居城の隄・壘・石壁を撤去する場合にも許可を求め、「先規の如く修補すべき事」、すなわち従来形式の保持が厳命されている。

<sup>(3)</sup> これに背いたことが、一六一九年に広島藩主の福島正則が改易された事由とされており、恐れを抱いた諸藩大名の間に一国一城令と武家諸法度の規定が浸透したことは疑うべくもない。そして、この規定が城郭において建造物を保持していく原動力となったのである。

このように、わずかな変更も許さない城郭の厳格な維持継承は、幕府が強制して始まったものである。しかし、結果として保持されつづけた城郭の姿は、長い時間の経過のなかで大名家と藩、そして城下の象徴となり、そのプライドを視覚的に表現するものへと変貌した。長い時間をかけて育まれた城郭の意義は、現代まで継承される強固なものとなったのである。

城郭の事例は多分に政治的・制度的な意味合いが強いが、茶室における古さへの肯定的感覚と評価は、深層的な美意識とも関連したものである。

古代に日本にもたらされた茶は、当初は医薬品として扱われ、室町時代には産地当てる「關茶」に用いられるなど、後世とは異なる存在であった。しかし、一五世紀の村田珠光、一六世紀の武野紹鷗を経て、千利休（一五二二〜一九一）によって後に「侘び茶」と呼ばれる総合文化活動へと変化し、利休の没後にはその門人を中心に隆盛を極めた。

初期の侘び茶に関しては不確実な部分が多いが、村田珠光の発言と伝えられる「薬屋に名馬を繋ぎたるが好し」や、利休の関与が確実視される茶室「待庵」(京都府大山崎町、国宝)の二見粗末な仕上げからは、古さの尊重と相通じる美意識を確認できる。

本来、茶室は茶人個人の美意識と創意工夫に基づいてデザインされるものであったが、流派や家元制度の完成とともに形式は固定化し、弟子筋に伝授継承されるものとなった。その伝授継承にあたっては、図面と模型を兼ねた「起し絵」が用いられており、オリジナルの忠実なコピーである「写し」の建設が可能となった。そのため、著名な茶室であれば、ほぼ同じ形態のものが複数存在する場合が多い。

ここで古田織部好みとして著名な三畳台目茶室の「燕庵」(京都市上京区、重要文化財)における写しの評価をみてみよう。

千利休の弟子である古田織部(重然、一五四四〜一六一五)は戦国末期の武将で、大坂夏の陣に際して豊臣方への内通を疑われて自害した。その死の直前に義弟である藪内剣仲に託された茶室が燕庵であるが、オリジナルは一八六四年(元治元)の蛤御門の変に際して失われてしまった。現存する燕庵は、一八三二年(天保二)頃に撰津の結場村(現神戸市)に建設された写しであったが、オリジナル焼失後に、複数存在した写しのなかで最も古いものであったことが評価されて、藪内家に移築されたと伝えられている。

この一連の経緯を見ると、創始者である織部が創作した茶室、すなわちオリジナルに最高の価値を見出していることは明らかで、写しというコピー作業自体を行う動機ともなっている。そして、オリジナルを失った状況で写しが複数存在する場合には、最も古いものがオリジナルへと昇格していることから、古さに価値を見出していることも明確である。また、オリジナルを重視する姿勢からは、後述する「復元」と類似した指向性も指摘できるだろう。

さらに江戸時代には、人物との関連で古い建造物を評価して保存しようとする動きも確認できる。その典型的な事例が、熊本市の水前寺成趣園に残る「古今伝授の間」である。

水前寺成趣園は、一七世紀に熊本藩初代の細川忠利が造営した大名庭園で、古今伝授の間は、富士山を象った築山と苑池を望む絶好の位置に立地している。この立地条件からは、古今伝授の間は作庭の一環として建設されたものに思えるが、本来この位置には酔月亭と呼ばれる別の茶屋が置かれていた。これが一八七七年の西南戦争で焼失し、さらに三十年以上経過した一九一二年に、古今伝授の間が京都から移築されている。

建造物の名前の由来となった古今伝授は、「古今和歌集」の解釈を秘伝として伝承するもので、細川家の祖である細川幽斎（藤孝、一五三四～一六一〇）が引き継いだ後、一七世紀の宮廷文化の担い手であり桂離宮の創設者としても著名な八条宮智仁親王（一五七九～一六二九）へと継承された。

細川幽斎が八条宮智仁親王に古今伝授を行ったのは、一六〇〇年（慶長五）三月以降のことで、場所は京都今出川に所在した八条宮本邸内の「字文所」ないしは「書院」であった。その伝授の場となった建築は、一七世紀中期に八条宮家の所領であった開田村（現在の京都府長岡京市）の「御茶屋」に移築され、さらに明治維新後の一八七一年に旧八条宮家所領が収公された後に、細川幽斎の子孫にあたる熊本藩細川家に下賜され、それが一九一二年に水前寺成趣園に移築されて古今伝授の間となったのである。

このような複雑でスウ奇な運命を辿って古今伝授の間は熊本に至ったが、移築は偶然的積み重ねではなく、関係者が意図的に行ったものであることが、西和夫の研究によって明らかになっている。

まず、今出川から開田村への一回目の移築は、八条宮家二代目の智忠親王の時代に行われたものである。智仁親王の活動の場であった「御学文所」の保持を願った智忠親王が、火事などの「非常の義」を危惧して、郊外の開田村に移築したのである。

ここでは、智仁親王にまつわる記憶と古今伝授という象徴的な出来事が重視された結果、その舞台となった建造物にも価値が見出されている。さらに防火の観点に基づいた移築からは、価値評価した建造物を後世に伝えようとする強い意志を確認できる。近代の歴史的建造物保存において一般化する移築および防災という手法を内包している点は注目に値する。

続いて熊本藩細川家が実施した二回目の移築は、八条宮智仁親王ではなく、先祖である細川幽斎を重視して行われている。遠隔地であったため、移動の対象となったのは、八畳間二室の柱や欄間、床回り、敷鴨居、天井および開口部の部材、それに狩野永徳・海北友松作とされる絵画が描かれる杉戸および襖にとどまり、庭園内の建築として間取りの改造も行われたが、あくまでも古今伝授が行われた建造物である点が強調されているから、一回目の移築と同様の価値判断が行われたものとみなしてよいだろう。

以上のように、古今伝授の間では、人物や行爲といった歴史の記憶と評価から出発しながらも、防災のために移築を行うなど、価値評価の対象が建造物へと変換・昇カしていくプロセスを指摘できる。建造物を残そうとする強い意志が確かに存在しているのである。

（光井渉「日本の歴史的建造物」より）

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- |         |      |      |      |      |
|---------|------|------|------|------|
| (1) ヒン発 | ① 貴賓 | ② 過敏 | ③ 類脈 | ④ 品位 |
| (2) 突ジヨ | ① 初級 | ② 序文 | ③ 徐行 | ④ 如来 |
| (3) 浸トウ | ① 銭湯 | ② 均等 | ③ 透明 | ④ 到達 |
| (4) スウ奇 | ① 崇拜 | ② 数学 | ③ 中枢 | ④ 好事 |
| (5) 昇カ  | ① 蓮華 | ② 劣化 | ③ 加法 | ④ 下校 |

問二 傍線部A「日本列島には古い木造建造物が多数残されている」の理由を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 木造建築物の源流となった中国大陸では南禅寺大殿のみが八世紀に遡る可能性があるに過ぎないから。
- ② 異民族の侵入による大規模な戦争がなかったため、破壊をまぬがれることができたから。
- ③ 建造物を管理する組織が維持継承され、定期的な修理が行われたから。
- ④ 古代から一貫して建造物の古さに価値を認め、尊重してきたから。

問三 傍線部B「問題は単純ではない」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 日本では伝統的に、日常的に行われる補修、十年から数十年単位で行われる一般の修理、百年から二百年に一度程度行われる根本修理、を適切に行ってきたが、その結果として外観が変化してしまうような大規模な修理が行われることで、建造物の歴史的な一貫性が失われた、ということ。
- ② 日常的に行われる補修、十年から数十年単位で行われる一般の修理、百年から二百年に一度程度行われる根本修理、を適切に行うことで木造建築物の寿命は飛躍的に延び、一貫して建造物を尊重してきたように見えるが、逆に一定期間で新造と破却を繰り返す例も見られる、ということ。
- ③ 「日本文徳天皇実録」の記事によれば、東大寺大仏の修理に関連して「旧物」の修理によって得られる「功德」は「新造」よりも大きいと記しているが、このことは当時古い建物を修理しないことが問題視されたためと理解することができる、ということ。
- ④ 「旧物」の修理によって得られる「功德」は「新造」よりも大きいことは事実であるが、逆に「新造」することによって得られる「功德」にも注目されるため、古い建造物を維持するということを多面的に捉える必要がある、ということ。

問四 傍線部C「定期的な支援を獲得するためのスキーム」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「式年造替」制度を整えることで獲得される建築に関する技術の安定的な伝授の体系、ということ。
- ② 地中に埋設された柱などの耐久性に由来する改築をスムーズに行うための社会的支援体制、ということ。
- ③ 新築の建造物に価値を見出すことで可能となる定期的な「新造」を維持するための世論操作、ということ。
- ④ 一定期間で新築と破却を繰り返すことでそれを維持するための支援を継続的に獲得するための仕組み、ということ。

問五 傍線部D「歴史的建造物」という存在は認知されていなかったものである」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 古代以来の日本文化においては、新築の建造物が持つ清新さに価値を見出していたことは否めず、一定期間を経て外観が変貌するような修理も行われていたように、古い状態を維持するという概念が成立することはなかった、ということ。
- ② 既存の建築物を解体した際に生じる古材を転用して新築することが一般的に行われていたため、「新築」と「修理」の区別をすることができない状況にあるため、「歴史的建造物」という概念は成立することができなかった、ということ。
- ③ 「随破修理」、すなわち破損したらその都度修理して使いつづけるという理念が確認されるが、これこそが「歴史的建造物」という概念の成立において極めて重要な考え方で、古い建造物であっても「壊す必要性」がなければ残すという結果につながった、ということ。
- ④ 長く維持された木造建築物は幾度となく修理が行われており、建築事業においては解体修理と新築の区別をすることなく「造営」ないし「修造」と表現されているように、中世までの社会にあつて、建築物の古さに特別な価値が見出されていたとはいえない、ということ。

問六 傍線部E「そのプライドを視覚的に表現するものへと変貌した」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 一国一城令と武家諸法度の規定により、結果として保持された城郭の姿が城下の象徴となった、ということ。
- ② 幕府によって城郭が厳格に維持継承されたことにより、幕府体制を維持するための事由として恐れられた、ということ。
- ③ 武家諸法度によって一国一城令が制定され、大名家と藩の城郭における建造物を保持していくための原動力となった、ということ。
- ④ 城郭の意義は長い時間をかけて変貌を遂げたが、その城郭の建造物としての自負心の成立をもたらしたのが幕府であった、ということ。

問七 傍線部F「著名な茶室であれば、ほぼ同じ形態のものが複数存在する場合が多い」の理由として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「侘び茶」の影響により、茶室の一見粗末な仕上げに古さへの尊重と相通じる美意識を確認することができるから。
- ② 茶室は茶人個人の美意識と創意工夫に基づくデザインであったが、同じ美意識を共有することで類似した意匠の形態が量産されたから。
- ③ 古さへの肯定的感覚と、オリジナルの忠実なコピーである「写し」の建築が可能となったことで、弟子筋に伝授継承されるものとなったから。
- ④ 流派や家元制度の完成によって様式が「起こし絵」として固定され、弟子たちへの伝授継承によって複数の「起こし絵」が複製されたから。

問八 傍線部G「古今和歌集」を説明したものととして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 『古今和歌集』は醍醐天皇の勅命によって編纂された我が国最古の「勅撰和歌集」である。
- ② 『古今和歌集』の歌風は「ますらをぶり」と評され、『万葉集』の歌風である「たをやめぶり」と対照をなしている。
- ③ 『古今和歌集』の撰者は紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四名であるが、その編纂の中心人物は紀貫之である。
- ④ 『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』を「八代集」と呼ぶ。

問九 傍線部H「一回目の移築と同様の価値判断が行われたものとみなしてよいだろう」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① オリジナルに最高の価値を見出す価値観の成立と、写しというコピー作業が可能となり、オリジナルを失った状況で写しが複数存在する場合には、最も古いものがオリジナルへと昇格するようになるが、水前寺成趣園への「古今伝授の間」の移築がまさにこの状況にある、ということ。
- ② 一七世紀に熊本藩初代の細川忠利が造営した大名庭園である水前寺成趣園には酔月亭と呼ばれる別の茶屋が置かれていたが、西南戦争で焼失したため、細川幽斎は八条宮本邸内の「学文所」を防災の観点から水前寺成趣園に「古今伝授の間」のみの移築を行った、ということ。
- ③ 一回目の開田村への移築に際しては八条宮家二代目の智忠親王の時代に行われたが、この時には智仁親王の活動の場であった「御学文所」の保持が目的とされ、火事などの「非常の義」を危惧して郊外に移築されたが、二回目の移築も同じ判断で移築が行われた、ということ。
- ④ 一回目の開田村への移築では八条宮智仁親王にまつわる記憶と古今伝授という象徴的な出来事が重視され、あわせて防災の観点によって行われたが、二回目の開田村から水前寺成趣園への「古今伝授の間」の移築においても同じ判断で移築が行われた、ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ 日本列島に古い木造建造物が多数残されているのは、古来から古い建物を意図的に維持していく制度が成立していたからである。

ロ 「解体修理」は一度更地に戻して組み上げるので、その行為自体は新築と全く変わるところなく、修理と新築の境界は曖昧であった。

ハ 建築物の古さを肯定的に捉えて、意図的にその形態を維持しようとする感覚は中世までの社会にあつては見出されておらず、建造物の新しさを求めつつ、古い建造物も否定しない感覚が存在していたようである。

ニ 茶室における古さへの肯定的感覚と評価は、深層的な美意識とも関連したものであるが、流派や家元制度の完成とともに美意識が固定され、古さへの美意識からオリジナルへの忠実なコピーである「写し」に対する評価へと展開したのである。